

☆初級詰将棋をひたすら追究。最近は棋力を省みず必死創作に燃える。

三宅 英治

持駒 角金桂

9	8	7	6	5	4	3	2	1
				△				と
				△	△	王		
				桂	桂	桂		△
						桂		

(詰パラ 昭和55年9月号)

好作である。

初形で2四玉か4四玉と上がられると絶望で、それを防ぐには初手3四金か2三角成しかない。3四金の押さえ込みは4二玉、4三金と飛車を取っても結局は上部に脱出される。

そこで2三角成だが上部脱出阻止が目的。続く桂の打ち替えは「1二と」にヒモをつける役目。これで王はぐつとせまくなった。とたんに2三角成と同じ所に同じ駒を捨てる。

「にくいねえ」。思えば4五に2五にそれぞれ金打ちの含みとした角の成り捨てがいかにも詰め物らしく、しかも桂の打ち替えをはさんだ技術は相当の実力である。

☆出題時には余詰は発見されず、入選扱いだったのですが、今回機械チェックしました所、初手より3四金、4二玉、3二桂成、同玉、2三金、同飛、同角成、同玉、3四角以下17手の余詰がありました。今回は修正に際して盤

面の駒数(特に5筋)を減らすことはできないかといろいろと検討しましたが、残念なからできませんでした。

(入選回数をマイナス1して下さい)

① 昭和29年9月10日。

② 滋賀県大津市。

③ たそがれ会社社員。

④ 詰パラ昭和47年3月号。

⑤ 約二百局。

⑥ 中田章道七段、森信雄七段、勝浦修九段。

⑦ 毎月懸賞出題「解けてうれしい詰将棋」(詰か必死かそれとも...)。

⑧ 歴史探訪、秘湯めぐり、必死創作。



23角成、同玉、3四角、3三玉、32桂成、同玉、2四桂、3三玉、23角成、同玉、3四金迄11手詰。
☆清水一男氏(中学校担当)解説。
今回は、角と桂の2種の打ち替えがテーマ。初形重く、投票に不利だったようだが、手順は軽快で解後感の良い